日本記者クラブ会報

第349号
1999年
(平成11年)
3月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル〒100-0011
©社団法人　日本記者クラブ
☎〇三-三五〇三-二七二一(代)

松下宗之氏（第十代理事長）逝く

初の「原発の炉心を見る会」

日本記者クラブの第十代理事長を務めた朝日新聞社社長・松下宗之氏の突然の訃報には驚かされました。同社は今年一月に創刊百二十周年を迎え、松下氏は数々の記念事業に陣頭指揮をとられてきました。いよいよこれからという、まだ六十五歳の若さでした。

松下氏が理事長に就任されたのは、クラブ創立二十五周年の年。戦後五十年の節目の理事長でもあり、ジャーナリズムの責任の重さ、自己改革を訴え続けられました。クラブは今年十一月一日に創立三十周年を迎えます。松下氏の遺訓にあらためて思いをいたす折、偉大な功労者として、記念式典にはぜひともご出席をいただきたかったのに、と残念でなりません。ご冥福をお祈りします。

さて、すでにご案内しましたが、三月二十五日午後、東京電力福島原発の見学会を行います。炉心部を覆う「シュラウド」の取り替え工事にあたり、燃料棒を挿入する前の容器内に入って、原子炉がどういうものか、目で見て体験してみよう、という試みです。

マスコミが炉心に直接足を踏み入れることは世界でも例がなく、科学記者の大先輩の言葉を借りれば「究極のディスクロージャー」です。安全性は東電側が百パーセント保証してくれています。

当日は午前八時半にバスで出発し、午後八時過ぎに帰るという、かなりの強行軍です。定員はバス一台のため四十人とし、参加希望者が多い場合は抽選になります。ただ、東電側のご好意で、クラブの見学会以外の時間帯で二十五日の午前中と二十六日の午前、午後についても、主にワーキングプレスを対象にプレス開放をしてくれることになりました。独自に見学を希望される場合は、東電広報部に直接申し込んでください。

昨年十月以来、法人賛助会員の新入会を呼びかけ、十二月までに七社が増えましたが、その後二社が入会し六十五社となりました。新しい仲間は、電力エネルギーを開発・供給する電源開発会社です。同社は大規模で実施困難な水力発電所などの建設を手がけてきた特殊法人ですが、橋本内閣で二〇〇二年をめどに民営化が閣議決定されています。もう一社は人材派遣会社のパソナブライトキャリアです。主に中高年を中心とした再就職支援のコンサルティング専門会社で、日本プレスセンタービルに本社を置いています。

一方、法人会員社の入会もありました。日本新聞協会加盟の夕刊紙・島根日日新聞社です。これで新聞・通信、放送の法人会員社は百五十社になりました。

二月の行事はカンボジアのフン・セン首相などゲスト四人と試写会一件でした。ゲスト欄などをご覧ください。

（専務理事　那部吉正）

自信に満ちあふれて入場するカンボジアのフン・セン首相（2・26）

松下前理事長を悼む

第十代理事長を務めた松下宗之氏が二月九日、肺炎のため死去した。社葬は三月四日、朝日新聞東京本社・浜離宮朝日ホールで行われた。

松下氏は一九三三年生まれ。東京大空襲で父親を亡くし、働きながら定時制高校を卒業、五四年東大医学部に入学した。その後、文学部に転部し美学を専攻、五八年卒業と同時に朝日新聞社に入社。政治記者として活躍し、佐藤栄作内閣時代に自民党担当キャップを務めたほか、田中角栄首相が日中国交正常化を実現した際には、同行記者として訪中した。その後、論説委員、政治部長、取締役編集局長、常務取締役総務・労務担当、代表取締役専務取締役編集担当などを歴任し、九六年に代表取締役社長に就任、二期目だった。

クラブでは八七年から会員資格委員を務め、九一年に理事・会員資格委員長に。副理事長を経て、九四年五月から九六年六月まで理事長を務めた。

節度と品位の言論人

斎藤　明
（毎日新聞代表取締役社長）

だれがつけたかは知りませんが、政治記者の駆け出しのころ、「メイちゃん」といわれていました。斎藤明の「明」を音読みにしたのが語源です。

年がたつにつれ、だんだんと回りから消えていったのですが、頑固に、最後まで、そう呼んでいた数人がいました。一人は政治家の福田赳夫氏であり、友人では松下宗之氏でした。ただ、松下さんの呼び方は独特で、「メイさん」でした。

日本記者クラブから、松下理事長のもとの企画委員長を務めたことで追悼文の依頼があり、四十年近い過去を回想したのですが、松下さんと私が知り合ったのは一九六二年ごろ、互いに首相番のときでした。

その後、同じ持ち場はなかったのですが、ウマがあったとでもいうのでしょうか、読売新聞の播谷実氏（現・人事院人事官）らと社を越えた交友を深めました。

麻雀ができなかったことも一因だったかもしれません。池田首相は、週末、必ず箱根に静養に出かけ、首相番が同行しましたが、記者団の旅館では、夜は麻雀が盛んでした。

麻雀をしない組はコップ酒でおだべり。まるで学生時代に戻った感じでした。よく俎上に載せたのは、「日本の近代化」、「保守と革新」などのかかわりで、丸山真男、大塚久雄、清水幾太郎など戦後日本の論壇の巨匠たちでした。

松下さんは「戦後革新」に深い理解と温かいまなざしを持っていました。しかし、それをイデオロギーとして硬直的に捕らえることは全くありませんでした。厳しい革新批判に耳をかすとともに、自らも、しばしば口にしていました。

戦後、間もないときに思想形成した私たちの世代は、人生の意味を、社会とのかかわりに見いだす見方が大勢でしたが、松下さんは、その意味を、人の生き方そのものの中にあるとの人生観の大切さも熟知していました。

そこには知的な刺激と触発がありました。そして、こういう会話を通じて、松下さんが節度と品位を身につけた、たぐいまれな資質をもった言論人であることを知りました。

私たちは、だれひとりとして、どこから来てどこへ行くのか、を知りません。しかし、私たちの生が永遠の中の一瞬であるにしても、自分で選んだペンという仕事を通じて交友を結び、人生を豊かにしたことは、かけがえなく素晴らしいことでした。別れが、どれほどつらく、深い悲しみを伴うにしても、誇るべき友人に出会え、同時代に生をうけた幸運に感謝をしたいと思うのです。

クラブ創立二十五周年（94・11・1）の際には、理事長として各界要人を招いて盛大に記念パーティーを開催するなど、記念事業を実施した。また会報の年頭所感などでは、一貫してジャーナリズムの自己改革を決然と静かに会員に訴えた。

橋本龍太郎、小泉純一郎両氏による初の自民党総裁候補ディベート（95・9・20）が行われたのも松下理事長時代だったが、自身もマンデラ南ア大統領、ガリ国連事務総長などの会見の司会を務めた。

会見終了後、ガリ国連事務総長と握手する松下氏（右　96・4・5）

「急ぎすぎたかなあ」

堀越作治
（元朝日新聞編集局次長）

昨年九月末、入院しているらしいと聞いたので、お宅へ見舞いの電話を入れた。すると、数日してから礼状が届いた。

「夏風邪から肺炎をこじらせたらしいのですが、体調は順調なのでご休心下さい。このさい六十五年分のオーバーホールにつとめる所存です」

だが、十一月二十日の政治部OB会でそのしゃがれ声を聞いたら愕然とした。背中からしぼり出すような声に、皆息をのんだ。それでも彼は年明けまで、朝日新聞社長としての激務に耐え抜いた。悲壮な最期であった。

苦難にみちた人生は、戦争末期の小学六年生の時から始まる。あの三月十日の東京大空襲で、深川の歯科医だった父を失ったのだ。兄と千葉にいて助かった彼は、食うや食わずで郷里信州伊那谷の飯島町にたどりつく。

しかし、先に疎開していた母や弟たちと合流したのも束の間、飯田中学に入るため、別の親戚に身を寄せる。間もなくカネが続かなくなって中退。小さな印刷屋に雇われ、腕っこきの活字拾いになる。

やがて、飯田長姫高校に普通科の定時制ができたので、中卒の検定をとり、入試にパス。今度は地方事務所の給仕になる。

勉強は夜遅くか、長野の県庁へ書類を運ぶ往復の車中だ。そして東大に合格。地方紙がこぞって取り上げた。

卒業後は朝日新聞に入るが、これが七つ目の職業だった。艱難が、勁草のような強靱さと気配りと、読みの深い人間に育て上げた。

ただそんな過去など感じさせない明るさがあったから、彼を「浮世絵の殿様」と呼んだ仲間もいた。

六〇年安保の二年後、政治部にやってくると早い時期に難しい共産党をもたされた。

その後は霞（外務省）クラブで日韓交渉を担当する。その分析力と情報の確かさは群を抜いていた。

日中国交回復の時は田中首相に同行し、後に編集局長、社長になってからはゴルバチョフ大統領や江沢民主席との会見も果たした。

社長として最も頭を悩ましたのは不況下の経営であり、同時に言論界全体の将来であった。ひとりその重圧に耐えている姿に、家人は胸が痛くなるほどだったという。

水泳で体調を整え、バロック音楽に慰めを求めたが、所詮は仕事一筋で息抜きできない性分だった。いずれは容子夫人とゆっくり旅を、と夢見ていたかもしれない。

若い頃、飲んでは社のあり方を慨嘆し、箱根の〝全舷〟では私と取っ組み合いまでした負けん気の日々が昨日のように思い出される。

病床で、夫人に「急ぎすぎたかなあ」ともらした一言に、万感をこめたのだろう。

二十一世紀を視野に入れたもろもろの構想を練っていただけに、どんなに残念だったことか。

クラブゲスト

亀井静香　日本再生会議代表幹事

九四年六月に自社さ政権発足の舞台回し役を務めて以来、年を追うごとに政局への影響力を増している亀井氏だが、当クラブへの登場は初めて。肩書ではなく「腕っぷしの強さ」でお迎えするゲストは、昨年二月の梶山静六元官房長官以来、約一年ぶりのことである。くしくも、この二人の剛腕が、非主流派の集まりである危機突破議連を母体とする新派閥結成をめぐって、さや当てを繰り返す中での昼食会となった。

これについて亀井氏はスピーチの中で「梶山氏らと作る危機突破議連のメンバー全員ではないが、新しい大きな集団に危機突破議連のメンバーの相当数が入ることが、危機突破議連のエネルギーを高めて行くに違いない」と強調し、新派閥への移行に慎重な河野グループや梶山氏の翻意を促した。また、今後の政局の焦点のひとつである、通常国会終了後の内閣改造と党役員人事について亀井氏は「小渕政権は党内の三分の一を無視してはやっていけない。総監督は、おやりになるに決まっている」と述べ、人事を断行して非主流派から人材を登用するよう強く求めた。

ただ、一方の主役である梶山氏は、ここにきて亀井氏への不信感を周辺に漏らしており、新派閥に参加しないばかりか、危機突破議連の結束にも亀裂が生じ始めている。

政局をリードする剛腕二人の確執が表面化したことで、クラブゲストの今後の人選とタイミングにも、少なからず影響が出そうな雲行きになってきた。

フジテレビ解説委員　**和田　圭**

2・1（月）昼食会　司会　和田圭委員　川戸恵子委員　出席123人

山崎　拓　前自民党政調会長

昨秋末、「近未来研究会」を立ち上げ、派閥の領袖となった山崎拓前政調会長は、後半国会最大の焦点となるガイドライン特別委員長に就任し、スピーチの大半をこの問題にあてた。「今国会中に成立させるのに必要な修正があるとすれば、衆院で修正するべきだ」と述べ、修正問題は、自らがリードする衆院段階で道筋をつける意欲を強調した。

山崎氏は小渕総理への評価について「目配りの利く人で、昨日も電話で話をしたが、自分の気がつかない点を指摘された。景気が回復すれば再選もありうる」と述べ、この秋の総裁選での小渕氏無投票再選の可能性に言及した。去年鮮明に打ち出した自らの立候補表明は何だったのか。それについては「総裁選があれば、出馬する」と後退姿勢に転じた。揮毫には「風雪磨人」と書き、今は「じっと我慢の時だ」と言い聞かせているようでもある。この言葉は、山崎氏の思師のはずの中曽根元総理が、防衛庁長官時代に前線自衛官を激励する言葉として中曽根氏自ら捻り出した名言だ。故大平正芳氏急死後の後継争いの政権取りに敗れた中曽根氏は、自らを奮い立たせようと、この言葉を好んでしたためていた。

自らの政権取りへの戦略が見えてこないためか、身内の柿沢弘治氏の造反知事選出馬や深谷総務会長の補選出馬問題などで党内外の風当たりが強いためか、柔道は六段、名門修猷館高校時代にはキャプテンをつとめ、寝技と一本背負いが得意な山崎氏にしては、持ち前の「攻めの政治家」のイメージをかなり欠いていたと言ったら失礼か。

日本テレビ解説室長　**菱山　郁朗**

2・22（月）昼食会　司会　菱山郁朗委員　橋本五郎委員　出席119人

クラブゲスト

ローレンス・サマーズ　米財務副長官

今ワシントンで最も輝いている一人、と言ってもよい。週刊誌タイムの二月十五日号の表紙を、グリーンスパン連邦準備制度理事会（FRB）議長、ルービン財務長官と一緒に飾った。どちらかの後任に、とのうわさもしきりだ。

貴賓室で「日本経済および皆さんの新聞の発行部数、そして米国経済もともに繁栄を」と記した。

サマーズ副長官は、これまでしばしば「対日強硬派」と書かれ、厳しい対日要求を在日米大使館が〝中和〟している、との評判もあった。

この日の会見でも、景気回復への楽観論を一刀両断に切り捨て「あらゆる道具を使って」内需主導の成長を、と求めた。ただ、日本の国民感情にも配慮した物の言い方もした。

小渕政権の一九九九年度〇・五％経済成長見通しについては、あからさまに否定せず「民間の経済予測のコンセンサスは、より低い成長を見込んでいる」と述べた。

食事中、タイム誌の特集のことを聞くと「良すぎる記事だ」とややはにかんだ表情を見せた。

クリントン大統領は九六年大統領選挙に勝利し、不倫もみ消し疑惑でも窮地から立ち直った。マクロ経済をうまくリードした「あなた方の貢献のおかげではないか」と持ちかけると、「われわれは幸運だった」と謙虚な答えが返ってきた。それは、一段上のポストを射程内におさめる人が言う言葉だった。

双子の娘（八歳）と息子（五歳）のことを話した時は目尻を下げた。

共同通信論説副委員長　**春名　幹男**

2・26（金）昼食会　司会　春名幹男委員　羽生健二委員　通訳　澄田美都子　森岡幹子　出席　260人

フン・セン　カンボジア首相

フン・セン首相が日本記者クラブで会見するのは三回目。実は九四年三月に行われた初めての会見も、司会を務めさせていただいた。

その時とくらべるとフン・セン首相は大きく変わった、というのが最大の印象だ。ラナリット第一首相と並んでの会見では、当然ながら主役は第一首相のほうだった。

だがいまやラナリット氏は国会議長に棚上げされ、自身は肩書から「第二」が外れた。名実ともに実権を握った自信に加え、覚悟のようなものが全身にみなぎり、それが質疑応答にも反映されていた。

向こう二年間の改革を見ていてくれと胸を張り、ポル・ポト派幹部に対する国際法廷設置問題では、一時は同派を承認した国際社会の矛盾を突いて逆襲した。東南アジア諸国連合（ASEAN）への加盟の展望に関しても「ASEANを喜ばすためではない」とクギを刺した。ハノイの首脳会議で加盟を見送られたことが、よほど憤まんやる方なかったのだろうと推察された。

この日終わった支援国会合のカンボジア支援が、予想額を超えたこともあって上機嫌で、感謝の意を表明した。会見中、コップの水を何杯も飲み干したが、会見場が乾燥していたというよりは、応答に力が入っての気負いゆえではないだろうか。

会見中、会場内で携帯電話の呼び出し音が何度か聞こえ、いささか耳障りだった。今後は事前に注意を喚起することも必要かもしれない。

産経新聞論説委員　**千野　境子**

2・26（金）記者会見　司会　千野境子委員　通訳　プン・サンボー官房長　宇尾真理子　出席　154人

書いた話　書かなかった話

取り調べの担当官と対面
三十年かけた取材を終える

鮫島敬治

北京市三里屯外交公寓から

一九六八年六月六日夜、北京朝陽門外三里屯外交公寓（ディプロマット・マンション）二階の日経北京支局兼住居の執務室で、私はメモづくりに励んでいた。中央政府の国務院経済関係現業各省庁が発行していた機関誌の多くは、文化大革命の始動以降半年ほどの間に廃刊が相次ぎ、定期購読料の残金が次々と郵便局経由で戻ってきた。

私はこの夜も、妻と娘が寝室で寝静まったあと、廃刊以前のこれら政府刊行物のほか、新華通信社の華文ニュース「今日新聞」の半年分の山を相手に〝宝さがし〟に取り組んでいた。鉱工業と交通輸送と農業、化学肥料や農薬の品種別生産量と農村での末端価格と使用量、学齢児童の就学率、都市と農村の所得動向…などに関する公式報道や報告論文の要点を部門別、業種別、地域別に分類、片っ端から抜き出しては、原稿用紙に細かい字でノートしていた。

特に、文革開始期までに中国科学院の農業関係各研究所の中堅スタッフたちが、実証的にまとめた多くの報告や論文は〝宝の山〟だった。若いとき日本国内の地方支局に出て、農業改良普及員のあとについて脱米麦と園芸作物指向の「新農山漁村建設」や「構造改善事業」を取材して回ったことが、発展途上の経済社会では非常に役立つ。とにかく机の上は資料とメモであふれかえり、書類整理用の子備づくえの上まで、クリップどめされたメモやスクラップがところ狭しと占領していた。

一週間後には、私は妻や娘と一緒に香港へ出る。香港で家族と別れて帰国させたのち、私は入境ビザを取得して再び北京に戻る。そして〝文革下の中国経済〟連載を執筆するつもりだった。党中央委員で政府閣僚と対日政策最高責任者を務め、記者交換も含む「LT」（廖承志・高碕達

一九九八年六月一日朝、ホテル長富宮飯店の東長安街を見おろす一九一五室に、「メガネ」が入って来た。視線が合うなり、ほぼ同時に二人は「おーっ」と声をかけ合い、互いに右手を差し出した。私はほとんど無意識に口走っていた。

「噢是了！　是你呀！　没錯児！　你来了！」（オゥ・シィーラ。シ・ニィーヤ。メィツオル。ニィーライラ＝うん、そうだ。やっぱりお前さんだ。間違いない。やって来たね）。同時に、お互いの右手を固く握りしめた。その瞬間、私の胸にあった一抹の疑念は消し飛んだ。

――「本当に彼が来るのだろうか。はたして、あのメガネの男なのか。中国の友人たちが真剣に手を尽くして突き止めてくれたにしても、その張志清なる人物が、私を取り調べたあの担当官に間違いないのか」――

いま、私と向かい合っているのは、まぎれもなく、その男である。「取り調べた男と取り調べられた男の間柄」が一九六八年六月に始まり、翌六九年晩秋に途絶えて以来、ざっと三十年ぶりの対面であった。握り合った右手を胸の前まで持ち上げて、二人は何回か上下に振り、そしてさらに外側から左手で包み込むように二重の握手をして、うなづき合いながら相手の目を見つめ合っていた。この間、二十秒も経過していなかったろう。

之助両氏の頭文字）を中国側で統括していた廖氏自身は、すでに激浪の渦中に沈んで久しい。だがそれでも廖承志事務所の友人は、私がビザ更新のためいったん香港へ出ることについて、「ビザは超特急で手配しますから、できるだけ早く北京へ戻ってください。ご心配なく」と言っていた。

プロレタリア独裁奥の院へ

六月に入ると北京は初夏。湯上がり後のステテコとランニング姿で作業中、私は七日午前一時、突然到来した中国人民解放軍北京市公安局軍事管制委員会によって逮捕連行された。シャツやズボンと靴下やハンカチなどを寝室のタンスから取り出す際、異様な雰囲気に目覚めていた妻に「心配するな。ちょっと行ってくる」と言う時間しかなかった。妻は私の安否を気遣いながら滞在ビザが満期になる一週間後に、五歳の娘の手を引いて、同じマンションに住む覚書事務所の宗像代表とフランス大使館のエスマン氏に付き添われて北京を離れ、香港で大原外報部次長に迎えられて帰国した。

日中記者交換の実現に伴い、第一陣九社九人が国交回復への〝かけは

し特派員〟として北京に赴任したのは、六四年九月二十九日。中国で生まれ大連を故郷とする私にとって、北京特派員になって中国を見つめ日本とアジアとの関係を追究していきたいというのが、ジャーナリストになった唯一の願望であった。九人のなかでは最年少の三十二歳だったから、リストやショパンのピアノリサイタルとか掛け合いの妙を楽しませる劇場にも足繁く通い、冬の朝は北海公園でアイススケートに汗を流す。ニュース映画に出てくる指導者への拍手や舌打ちの度合いから、人民日報や北京日報の活字の大きさとは関係ないところで、人々の敬愛や信頼とその逆の対象を知ることができた。

六三年に発足したLT関係は、池田首相の意を受けた松村謙三氏が北京で周恩来首相と行った会談での申し合わせ「日本政府は台湾との関係を表面立って深めず、この限りにおいて中国は日本政府を論難しない」が出発点だった。日中経済交流に機動性を持たせ「長期・総合・大型」の軌道に乗せる第一号として、日本政府は同年八月、輸出入銀行融資の適用も含めて倉敷レイヨンのビニロンプラント中国向け延べ払い輸出を認可した。このルートで政治家の交流も進み、LT連絡事務所の相互開設と新聞記者の交換も実現する。

だが六四年十一月に佐藤内閣が登場すると、中国向け長期延べ払い輸出に輸銀資金を使わぬ旨を台湾側に表明した『吉田書簡』の拘束力を認めた結果、プラントや貨物船の商談は相次いで契約破棄に追い込まれる。しかも彭真北京市長が訪日を拒否され、さらに台湾向け一億五千万ドルの政府借款供与が決まるに及んで、池田内閣の後半二年間にわたって守られてきた申し合わせは、日本政府の側から破られた。

佐藤内閣の登場から十日間も経ずして、破局への出走は始まる。文革始動の遙か以前に、日中関係は崩壊した。この事実関係は今後とも確認しておかねばなるまい。しかも佐藤首相は六七年九月、台湾を訪問する。日本の首相訪台は岸信介首相以来二度目だったが、岸訪台が東南アジア歴訪の〝途中下車〟だったのに対し、佐藤訪台はそれ自体を主目的とした。こうした局面下で、LT五カ年協定は六七年末で期限切れ空白に。

したがって古井喜実、田川誠一両代議士と日中総合貿易連絡協議会の岡崎嘉平太会長らが北京入りして六八年二月からのLT延長交渉は、一カ月余をかけて難航を重ねた。その結果、会談コミュニケでは、「政治三原則」（①中国を敵視しない②二つの中国を作る陰謀に加担しない③日中国交正常化を妨げない）と「政経不可分の原則」とを〝双方の同意事項〟として明文化した。同時に「五カ年協定のLT関係」は「単年度協定の覚書関係」に移行し、協定の名称からも事務所の看板からも廖承志・高崎達之助両氏の氏名は消えた。

この重大な変更は、LTのルートで取り仕切られてきた記者交換にも反映した。当初来の九社九人の枠組みは、六七年秋以来の国外退去や資格喪失で半減していたが、修正協定では五社五人に圧縮され、より基本的には「覚書会談コミュニケ」に明文化された原則の順守が、記者交換の場でも主柱となった。

日本の新聞界が、北京の拠点を「中国総局」と位置づけ、その下に上海や広州や香港の支局と横並びする形で台北にも支局を持つ、つまり香港の中国復帰を踏まえ、「一つの中国原則に基づいて、台湾海峡の両側に取材報道拠点配置」体制を整えたのは、それから三十年後の一九九八年になってからである。長く、曲折と波瀾

に富んだ道程であった。

文革以前には六人を擁したソ連記者のうち、タス通信とコムソモルスカヤ・プラウダとイスベスチヤの三記者が国外退去で六六年十二月二十四日に北京を離れ、AFPやロイター、ユーゴスラビア国営通信のタンユグも追放や自宅監禁、そして日本勢は前記の通り。その結果、六八年になると文革以前からの常駐外人記者は私一人になった。外交部新聞司（外務省報道局）が私を国外退去させる理由を見つけられないことに苛立ったのか、公安を抑えた軍の極左派が私をプロレタリア独裁の奥の院に連れ込み、三年八カ月にわたった私の北京特派員生活は中断された。

「ほかの日本人記者は、一年かせいぜい二年で交代するのに、お前は三年余もいてさらに駐在しようとしている」「東京の上司も認めるように、お前は非常によく活躍していた」「我が国の情報を大量に集めて国外に流し、しかも新聞紙上に発表していた」「お前の流す情報は正確なものであった」「ここで通訳を付ける必要はない、と承知している」――

結局、「資本主義国家の資産階級新聞の反動記者が、長期的計画的組織的に中国の情報を窃取した」のが私に被せられた罪状。確かに廖承志氏が日本人記者との朝食会でしゃべった話などは、人民日報をどうひっくり返しても見つからない貴重なニュースや見解だったし、愛新覚羅溥儀――ラストエンペラーの訃報が公式発表より三日早く私の北京電で世界中をかけめぐり、日本でもよく知られた対外貿易部門の大御所・南漢宸氏自殺も私の北京電がいち早く伝え、稲山―日向論争のさなかに住友金属工業がカルテル破りで対中単独商談をまとめた鉄鋼輸出大量成約とか、文革直前に松村謙三氏訪中歓迎を表明した廖承志談話など、一面トップを飾った特報も私の動きを監視させる材料になったようだ。

首脳の公式陳謝で「難友」に

釈放即国外追放となった私は、六九年十二月二十日に深圳から香港側羅湖へ出たところで小島外報部長に迎えられた。「苦労をかけたね。すまなかった」「ご心配かけました。真向法を続けてこの通り元気です」。一年半ぶりの日本語の会話だった。

その後、七六年に周恩来首相、朱徳全人代議長、毛沢東主席が死去し、いわゆる四人組が宮廷クーデターで一網打尽にされ、七七年に鄧小平氏が三度目のカムバックをすると、「すべての問題に決着をつけたので訪中して頂きたい」と、中国大使館が公式招待を伝達してきた。

七七年九月二十九日昼前、北京人民大会堂で李先念党副主席兼副首相は「まことに悪うございました。あなたが北京時代も帰国後も一貫した姿勢であることを、我々はよく承知しています。今後もぜひ往来を重ねてください」と、公式に陳謝と名誉回復を表明した。そして「実はその当時、私も打倒されていました」と言う。

党中央組織部長として私の問題決着に尽力した胡耀邦総書記は「あなたは我々の難友だ」と言って、痛くなるほど私の手を握りしめた。「難友」とは、共通する難局と戦って耐え抜いた友人のことだと言う。また社会科学院の友人たちは、テーブルを叩いて激しく論争しても心が通じ合っている友人という意味を込めて、私のことを「諍友」と言う。

しかし、最高首脳や高級幹部たちが公式に陳謝し、すべてを林彪や四人組による間違いだったと〝十把一からげ〟式に詫びられても、こちらは釈然としない。取り調べの状況と経過は、帰国後にメモに残した。だが、拘留の契機、要因の構成、審査の推移…など、何がどのように絡み合い、いかなる曲折を経て、どういう力関係の下で釈放即国外追放に決まったのか。そして、軍事管制の政治将校と本来の公安審査官たちとの抗争がどう投影し、国務院上層部や対外部門はどう関知していたのか。それに、あの「メガネ」はどうなったのか。…

七七年秋に首脳の公式謝罪表明を受けたあと、私は訪中を重ねつつ機会あるごとに、私を取り調べた担当官に会わせてほしいと要求した。もちろん、これは日本人の誰にも言わず、粛々と進めた。九四年六月の舌ガン手術以降、私の要求は執拗になった。相手もほぼ同じ世代だとすれば、現役引退後が会いやすい環境になるだろうが、やはり健康に支障が出れば難しくなる。相手は農村に下放されて辛酸をなめ尽くしたとの消息があったり、あまりにも申し訳なくて会わせる顔がないとのメッセージが伝えられたりした。九七年末以降は、先方からの対面同意連絡を待った。やがて、北京からわが家に中国語のファクスが入った。

ようやく対面は実現し、彼は誠実に詫びた。そして、私の衰弱がひど

かったので、公安に君臨する軍代表を相手に三カ月かけて食事の改善を果たした努力だけは、ぜひとも知ってほしいと繰り返し述べた。六九年十二月の帰国の際は以前より痩せていたにせよ、食事がガラリと改善されたため、最後の半年で私の健康が著しく回復したことは確かである。

彼もまた右派として農村へ

私に国外追放の決定が出る一カ月ほど前に彼の姿が消えたのは、「仕事本位で政治性をわきまえぬ右派」として農村へ放り出されたからだという。懇談とヒアリングが食事も挟んで二日にわたる間に彼の言葉も打ち解けて、こんな対面は聞いたことがないと、目を潤ませていた。往年の取り調べに話が及ぶと、彼はゆっくりと言った。あなたは公正剛直で、何よりも風格があった、と。

私は長年の懸案決着にほっとして、八月初めに四年ぶり二度目の手術をした。

引退した張志清氏は、いま中国政法大学と警察学院で「偵察学」（捜査学）担当の客員教授を務めている。対面実現に尽力してくれた友人によると、刑事法廷テレビドラマのシナリオづくりを手がける〝円満高名な判官〟だという。十二月後半に経済界の人たちとの調査団長として香港から北京に回った際、私は直接自宅に電話して追加補充ヒアリングと懇談のひとときを持った。

三十年をかけた取材は、ようやく終わった。すると彼は、いつ回想録を出すのかと聞いた。そして、次は必ず夫妻で来てほしい、故郷の青島や東部地区の景勝地を夫婦でぜひ案内したい、と繰り返した。

張志清氏（右）と30年ぶりに対面した筆者

激浪に耐え抜いた硬骨漢たち

社会科学院の工業経済研究所にやはり私と同世代の老朋友、呉家駿元所長がいる。九八年後半には東大社研にフェローとして滞在していたが、帰国後の彼を年末に研究室へ訪れた際には、討論と料理の両面ともすっかりご馳走になった。その彼は文革終了以降、それまでざっと二十年も「右派」の烙印を押されて日陰者扱いされていた朱鎔基研究員の名誉回復請願を繰り返し出し続けた。

一九八二年秋、経済技術交流に関する日中国交正常化十周年記念シンポジウムが北京国際倶楽部で開かれた際、日本側パネリストの一人として出席した私は、そこで初めて中国側のパネリスト朱氏に会った。国家経済委員会技術改造局長という肩書だった。

中国では文革時に受けた残酷非情を訴える人は多いが、一九五〇年代の反右派闘争をはじめとする政治風暴の過程では加害者だった人が少なくない。いま外からの通貨金融危機浸透と内での長江や松花江の大洪水災害と戦いつつ、国有企業や金融システムや行政機構の改革に政策面でも実行面でも不退転の決意で挺身しているのは、五〇年代に右派とされて耐え抜いた硬骨漢たちである。中国・アジアと共生していくには、助言と苦言と提言を惜しまず、長いスパンで対応していく姿勢が欠かせない。苦言あっての友人である。

日本国内でも戊辰戦争で受けた惨劇を語り継いできた会津若松の人々が、謙虚な姿勢を積み重ねる長州の人々に心を開き、未来思考での交流や対話を軌道に乗せ始めたのは最近数年来のこと。ここに至るまでに百三十年の歳月を要した。過去に決着をつけてこそ、未来共生への展望を分かち合える。考えさせられることの多い一九九八年であった。

きめじま　けいじ会員略歴　一九三二年生まれ大阪外大卒　日本経済新聞社初代北京特派員　論説委員　論説副主幹　取締役大阪編集局長　常務東京編集局長　専務総合情報・国際・事業担当などを歴任この間に日本記者クラブ理事長を務める現在　日本経済研究センター客員研究委員

書いた話　書かなかった話

青島幸男東京都知事が、中野ブロードウェイで「なすべきことはすべてやった」と迷言を吐いて、再選不出馬を宣言してしまったのは二月一日のことだった。

都庁の有楽倶楽部詰めのわが社の四人ばかりか、日本国中が、あの「シャボン玉ホリデー」でよく見かけた、植木等さんや谷啓さんたちがずっこける思い出の名場面そのものとなった。

青島知事はもともとどんでん返しが大好き。新宿副都心の都庁にいるときは、役人以上に固い役人言葉を遣うが、私人に戻ると、タレントの青島さんになる。酒が入ると舌も滑らかになる。「青島だあーで知事が務まるかい」とか「一軒一軒回るドブ板選挙なんかだめ」など、自民党の都議が聞いたら青筋を立てそうなこともざっくばらんに話す。

不出馬を決めた真相はいまだによく分からない。「重責から開放されたかったのでは」「支持率が下がり、負けを予感した」などともいわれているが、そんな青島知事をみていると、放送作家として活躍していたころの血が騒いで、受けを狙ったのではないかとうがった見方をしたくなる。

ところで、都知事選の候補者選びは昨年秋から始まってはいたが、二月一日の時点では、舞台の幕はまだ半開きの段階。共産系の団体が推す三上満氏が出馬表明した以外は、青島知事の存在、というよりは、都内に六百万人はいるとされる無党派層の恐怖に脅えて、各党の人選は難航を極めていた。民主党にいたっては、青島知事推薦の動きもあった。

知事の不出馬表明でその日から、堰を切ったように候補者選びは本格化する。まず飛び出したのが、四年前は告示直前まで迷い続けた末に出馬をあきらめた鳩山邦夫氏。

この人、朝と夜で発言がぶれる。意欲的かと思っていると、急に消極的になる。

社会部記者には不慣れなオフレコの「懇談」もよく行うのだが、なかなか本音を語らない。ただ、今回は勝てると思ったのか、わずか一週間ほど後には出馬を決断する。

前回あれほど担当記者を振り回していたはずなのに「四年前に迷ったのは一日半だけ」。困った人だ。

次は自民党。年末に田中真紀子氏を担ごうとしたが、目白の豪邸前に一人で張り込んだわが社の記者に「青島さんに一票入れてもいい」。結局、公明党を意識して明石康氏擁立で決まった最中、新聞休刊日の二月十四日朝、柿沢弘治氏が都知事のイスへの未練を断ち切れずにテレビで思わず出馬表明してしまう。

ここで党候補だった明石氏が迷い始める。都知事選の立候補者選びは、明石氏が自民党の出馬要請を受諾して決着というシナリオだったが、明石氏の回答次第では、森喜朗幹事長の首が飛び、政変にも発展する局面に。

その後は周知の通り、舛添要一氏と野末陳平氏を加えた主要候補六人による争いとなったが…。

待てよ、実は知事選の取材は終わっておらず、幕が開いたばかりなのだ。

そこで当落の行方だが、三上氏を除く五人とも無党派を意識し政党色を出さない戦術。政策にいたってはにわか勉強丸だしで、口々に行革を叫び「青島さんとどこが違うの」（都庁幹部）と言いたくなるくらい。わが社の世論調査では再選挙もあり得る展開だ。

すごう・しょうじ　一九八五年入社　千葉支局などを経て社会部　九七年から有楽倶楽部

ワーキング プレス

—東京都知事選—

ドタバタ調の幕開けだったが

▶菅生彰二
（東京新聞）

列島報告

―岐　阜―

産廃規制 全国初の条例制定

雒井　洋
（岐阜新聞社報道部副部長）

一九九六年十月三十日に岐阜県可児郡御嵩町で発生した柳川喜郎町長襲撃事件。自宅マンションで二人組の暴漢に襲われた町長は重傷を負い、事件の背景には町長が建設に反対していた産業廃棄物処理施設問題が絡んでいるとみられた。県警は犯人の解明に全力を挙げたが、二年四カ月にも及ぶ長期捜査の結果、町長宅の電話を盗聴していた政治団体幹部や興信所経営者らが電気通信事業法違反などで逮捕、起訴されたものの、襲撃の実行犯は捕まっておらず、事件は迷宮入りの様相さえある。

この事件を契機に町民の産廃施設反対運動は一気に燃え上がり、一昨年六月二十二日、産廃問題としては全国で初めての住民投票が行われ、圧倒的多数で反対派が勝利した。投票結果を受けて柳川町長は建設計画を事実上凍結。産廃施設の必要性を訴え、計画に前向きだった梶原拓県知事は「都市計画法上、町長が同意するか否かが明確にならない限り、事務手続きはできない」とし、事業はストップ。県と町とは対立したまま、現在もこう着状態が続いている。

一方、九七年十一月には、美濃市で大量の廃タイヤが燃える事件が発生した。それ以前に、県は野積みされた廃タイヤの撤去を求めて業者に改善命令を出したが、法的強制力がないため対応が遅れ、火災を未然に防げなかった。県は廃火災は岐阜県に重い課題を突き付けたが、産廃問題の解決に県は並々ならぬ決意で臨んでいる。梶原知事は福祉施設などを併設する「地球環境村」構想を掲げ、県内を五つに分けた圏域に自己完結型の産廃処理施設の設置を明言している。住民の理解を得るには、なお幾多の議論が必要だが、設置に前向きの姿勢を見せる自治体も出始めてきた。

また、不法投棄など違法行為に対処するため、今年四月施行を目指して、二月県議会に廃棄物処理法を補強する産廃処理の規制条例案を提出した。条例は排出業者に適正処理の現地確認を義務付け、解体業者に建築物解体工事の事前届け出を出させるなど、国の法律よりも一歩踏み込み、責任を強化しているのが特徴。産廃を包括規制する全国初の条例で、違反者には業者名の公表や罰金を科す罰則も設けている。

美濃市の産廃火災のようなケースでも、この条例によれば業者に撤去を勧告できる。県は「現行の国の法制度では対応できない。十分ではないが、これを機に議論を深められれば」と期待する。産廃をめぐる岐阜県の問題は、全国の自治体が抱えるひずみそのものだ。県独自の条例案は、後手に回りがちな厚生省の廃棄物行政に一石を投じる試みでもある。

町長襲撃事件から住民投票、産廃火災、最近の県の取り組みに至るまで、生ニュースや連載などで追跡してきたが、日々の新聞紙上で産廃問題の深層を十分に報道しきれていないという思いが強い。産廃問題の取材の間口は広く、環境保全、資源リサイクル、さらには地方自治、住民運動の在り方も鋭く問いかけている。一地方紙として、どこまで多角的に問題点をえぐりだし、解決策も含めて読者に伝えていけるのか。現行法で対応できないという自治体のジレンマは、われわれ記者自身の思いでもある。

（うすい・ひろし）

ことばの散歩 ⑤

ネット語（下）

インターネット上の記事には締め切りがない。いや、締め切りが無限個あるといったほうが正確かもしれない。配信元のコンピューターに入稿してある記事は、好きなときに呼び出して書き換え、繰り返し配信し直すことができる。

ちょっとした表現を変えてみたり、間違いを修正したり……。そう、この修正というやつ、つまり、訂正を簡単にやってのけられる点が一大特徴なのだ。

新聞や雑誌の記事では、世に出てしまった間違いを、消し去ることはできないし、訂正したらしたで、その文言は記録としてずっと残る。ところが、インターネットでは、配信元コンピューターの記事を書き換えてしまえば、間違いの証拠、痕跡は、この世から消滅する。

私がインターネット上で書いている記事も、誤字、脱字や事実誤認が多い。専門の校閲者によるチェックを受けていないためでもある。記者の気まぐれで何度も書き直すものに、校閲者を頼むわけにもいかない。

間違いを指摘してくれるのは、たいてい読者である。間違いを見つけると、すぐ電子メールで、教えてくれる。つべこべ弁解せず、素直に感謝し、さっさと書き換えて、あとは何食わぬ顔。

締め切りと訂正は、記者にとって悪夢だが、インターネット記事の時間的自由のおかげで、その二つから、私は解放されている。当然ながら、文体は一段と緊張感を喪失したが。

困ったことに、私が新聞に書く記事より、インターネット上に書いている記事のほうが面白い、という読者が多い。

朝日新聞インターネットキャスター　**穴吹史士**

■会議報告■

第125回施設運営委員会

（2・8　小会議室）

十二月、一月の貸室の利用状況とアラスカの売り上げを事務局から報告した。

出席　石川委員長、池田、中山、今田、田村、山田、宮川の各委員。

第199回会報委員会

（2・15　小会議室）

二月号、記録版について意見交換したあと、三月号の編集を協議した。四月号からの『写真回廊』の短文執筆者候補を決めた。

出席　住田委員長、久保、秋山、伊波、埜邑、和田の各委員。

第258回会員資格委員会

（2・15　小会議室）

島根日日新聞社の入会と、三月一日付での各社からの会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席　松崎委員長、上田、船田、玉川の各委員。

第274回企画委員会

（2・18　宴会場）

行事報告の後、今後のクラブゲスト候補を協議したほか、五月の総会記念講演の講師候補を決めた。

出席　重村、橋本、宝利、立岩、小林、宇治、春名、福沢、羽生、川戸、菱山、和田、ワーグナー、浅井、饗庭の各委員。

〈**理事交代**〉

北海道新聞社
（新）鏡谷光司　東京支社長
（旧）田村泰章

〈**法人会員代表変更**〉

朝日新聞社
（新）箱島信一　代表取締役社長
（旧）松下宗之

北海道新聞社
（新）東　功　代表取締役社長
（旧）坂野上明

神奈川新聞社
（新）水木初彦　代表取締役社長
（旧）森本敏男

四国新聞社
（新）平井龍司　代表取締役副社長
（旧）岩田清祐

南日本放送
（新）又木章一　東京支社長
（旧）山下良朗

試写会

ユー・ガット・メール

You've Got Mail

互いに本当の名前も顔も知らない男と女が、毎日、電子メールでは素直に心の真実を打ち明け合う。やがて恋愛感情が高まってデートを試みると、なんと二人は、毎日のように顔を合わせる商売敵。しかしいつの間にか、二人の心はひとつになっていた。

ひと昔前にはやったペンフレンドの恋愛物語を、現代に置き換えたパソコンのメールが取り持つ愛の行方。最初から結末が見えている、たあいないラブ・コメディーではある。

だが、舞台は古き良き町並みと、超モダンな現代風景が混在するニューヨークの下町。主演は、当代人気随一の俳優トム・ハンクスとメグ・ライアンのカップル。映像と音楽に独自の温かい優しさを見せるノーラ・エフロン監督とそろうと、とても美しく、しゃれた、心楽しい映画になる。

母親が残した小さな絵本の店を経営するキャスリーン（メグ）と、そのすぐ近くに出店する大型書店チェーンの御曹司ジョー（トム）。会えば反目し合う二人は、実は互いに同棲中の恋人より、素直に気持ちが通じ合うEメールフレンドだった。ある日二人はデートすることになり、トムが自分を待つ人を胸弾ませて物陰からのぞいてみると……。

見終わってだれもがにっこりする映画。若い恋人たちに、またメールを始めたいと思っている心若き恋人たちに、おすすめする。

共同通信社論説副委員長　**田村　和子**

囲碁の会（二月二十日）参加二十八人。優秀賞（敬称略）＝安田志郎、中俣富三郎、中野正彦、相川誠一、吉川真澄。前回の初参加＝山城孝夫（個人D会員・フジテレビ出身）。次回開催日＝三月二十日（土）午後一時。クラブ宴会場。

寄贈書

歴史の瞬間とジャーナリストたち　朝日新聞社
激動の半世紀　沖縄タイムス社50年史　沖縄タイムス社
青森テレビ　30年の歩み　青森テレビ

ピジョン・ボックス

プレスセンターの八階に総局がある中央日報の崔詰周総局長が二月末に帰国しました。

帰る前、最も印象に残っている仕事はと聞いたら、外相当時の小渕さんとの単独会見（98・3）と。「日本の外相が韓国の新聞のインタビューに応じたのは初めてでした」。その時、「田舎の小学校の校長先生のようなイメージ」と記事に書いたら、総理になってから申し込んだ書面インタビューの回答に「校長先生と評されてうれしかった」とコメントが添えられていたらしい。

また、昨年十一月末のクラブでの江沢民主席会見も印象に残っている、と。台湾のテレビ記者が韓国には〝謝罪〟があったのに、中国との共同声明にはなかったことをどう思うかときいたとき、「答えるまでに五、六秒間の沈黙。非常に緊張した瞬間でした。江主席は巧みな言葉で難問を切り抜けましたが」。

異動の季節です。同じ中央日報の李哲浩会員も近々帰るそうです。新華社では王大軍東京分社社長が着任しました。前任の劉文玉さんは仕事の関係で夏ごろまで滞在とか。

ゲストカード

韓国記者研修（フォーリン・プレスセンター3・7～17）申港楽（光州日報）金潤錫（大田日報）朴鍾奉（毎日新聞）朴昌浩（釜山日報）金永弼（漢拏日報）

招待券

朝日新聞社から「中島潔の世界展」（～3／22）「ドラクロワ　民衆を導く自由の女神展」（～3／28）「近代日本美術の名品展」（～3／30）「日本列島クロニクル―東松照明の50年」（～4／4）「宋磁展」（～4／13）、**産経新聞社**から「ピカソ展」（～6／14）の招待券をそれぞれご恵贈いただきました。お礼申しあげます。

プロフィール

二月一日付入会の個人D会員、法人賛助会員、特別賛助会員の方々です。

◇個人D会員（五十音順）

写真回廊

写　真　青木　久雄
（1984年読売新聞入社　東北総局　北海道支社を経て現在　東京本社写真部）

（原宿・表参道で　2.18）

もうすぐ春

「あれ、あんなところにだれかがコートを」と思ってよくみると、コートもドアもホンモノではない。工事現場の塀に描かれたものだそうだ。なかなかおしゃれな風景だ。

脱いだコートを手にした若者も、塀に映った梢のやわらかい影も「もうすぐ春ですよ」の気配いっぱいの写真だ。

建設工事現場といえば、どことなく武骨で無愛想なイメージがあるが、これはまた茶目っ気たっぷりで、通行人が思わず立ち止まってしまいそうだ。

私は子どものころから工事現場が大好きだ。起重機やパワーショベルの動き、コンクリートを流し込む人の動き、どれもこれも見ていて飽きない。

ところが、街なかの建設現場はどこも高い塀を張りめぐらしていて、外からの目をふさいでいる。工事現場大好き党には残念至極である。

いまから十数年前、ニューヨークのビル建設現場でイキなはからいに出くわしたことがある。塀のところどころにのぞき窓がとりつけられ、通行人が立ち止まってのぞけるようになっていた。かの地にも同好の士がいるもんだ、とうれしくなったのを思い出す。

この写真の塀にもドアだけでなく、ついでに小窓を描いたらどうだろうか。もちろん、小窓にはしっかりホンモノののぞき穴をあけて。

（和田千年）

島根日日新聞社が入会

三月一日付で島根日日新聞社が入会しました。一九八〇年に創刊、島根県東・中部地方の夕刊紙として親しまれています。

登録会員は左記の通りです。

法人会員代表　菊地栄美子　代表取締役社長
基本会員　菊地恵介　取締役東京支社長
本社　〒693-0064　出雲市里方町五四五
　電話　〇八五三―二三―六七六〇
東京支社〒141-0022　品川区東五反田三―一六―四六
電話　〇三―三四四〇―二〇五三

ゴルフの会　会員を募集しています

春のコンペを四月下旬に予定しています。初めての方も大歓迎です。日時など詳細は四月号会報でお知らせします。ゴルフ愛好会員は、ぜひ同好会へもご参加ください。連絡は事務局の小橋までお願いします。

訃報　森野朔郎会員（共同通信OB・73歳）が二月十二日心筋こうそくのため死去されました。謹んでご冥福をお祈り申しあげます。

『日本の司法はどこへ行く』

米沢　進（共同通信OB）

記者生活の最後の五年間を論説委員として司法の世界に目を向けてきました。その結果、司法がいかに閉鎖的な社会であるか、行政や立法と同じように改革しなければならない問題がいかに山積しているか、それが気になって仕方ありません。「時間と金と手間ひま」がかかる民事訴訟、自白調書に寄り掛かる刑事裁判と代用監獄、弁護士過疎。どれもこれも、これから手をつけなければならない問題です。司法をもう一度、見直してみようというのが私の視点です。

（花伝社　一、八〇〇円）

マイBook マイPR

『忘れえぬ人々―放送記者40年のノートから』

辻　一郎（毎日放送OB）

四十余年におよぶ放送記者生活のなかで、多くの人たちにお目にかかった。そのなかで特に強い印象を残した人たち、佐藤春夫、谷崎潤一郎、植村直己など七人の横顔を描く。

なかでも戦前、戦後、南米を舞台に活躍し、晩年は私財を投じてインカ文明の研究にあたった天野芳太郎や、民放初期の経営者、後藤基治をめぐる話などは、梅棹忠夫氏が推薦文に書く通り「日本の現代史の一局面をくっきりと切り取った」読みものといえるかもしれない。

（清流出版　一、六〇〇円）

会員現況　法人会員　一五〇社　基本会員　八一三人　個人会員　一、八二一人　法人・個人賛助会員　六五社　一九六人　特別賛助会員　五二人　名誉・功労会員　一四人
計　二一五社　二、八九六人

三月の行事（4日現在）

東京都知事選立候補者連続会見
23日（火）午後1時～2時　**三上　満氏**
　午後2時30分～3時30分　**鳩山邦夫氏**
　午後4時～5時　**明石　康氏**
24日（水）午後1時～2時　**柿沢弘治氏**
　午後2時30分～3時30分　**舛添要一氏**
　午後4時～5時　**野末陳平氏**

（行事案内電話　〇三―三五〇三―二七六四）

会報委員会
委員長＝住田良能
委　員＝久保伸太郎　秋山民雄　伊波新之助　埜邑義道　和田千年　平野恭子
連　絡＝長谷川和子　本庄五月
（電　話　〇三―三五〇三―二七二二）
（FAX　〇三―三五〇三―七二七一）